

〔資料紹介〕

常福寺所蔵・「圓山大迂／圓山惇一書翰（北方心泉宛）」について

川邊 雄大

はじめに

筆者は近年、明治期の東本願寺（真宗大谷派）の海外布教に関心を持ち、主に明治初期に東本願寺上海別院で行われた布教僧と清末文人との漢詩文を介した日中文化交流について研究してきた。なかでも、加賀出身の布教僧である松本白華^①と北方心泉^②に重点を置いて研究してきた。

北方心泉は、明治十年（一八七七）から十六年（一八八三）にかけて上海別院で布教活動を行い、海上派文人たちとの交流の中で北派書風を身に付け、楊守敬とは別にそれをわが国に齎した書家として一般には知られている。しかし、従来の研究では、彼がいかに清末文人たちと交流し、北派書風を習得したかについては不十分な点があった。

そこで筆者は、心泉が住職であった常福寺（金沢市）に所蔵

される清末文人らが心泉に贈った尺牘や書画類を用いて、彼らとの文化交流の実態を明らかにした^③。

また、心泉の友人である漢学者・三宅真軒の金沢における学問の一端を明らかにするとともに^④、真軒が心泉の小学金石類書籍購入のために作成した『文字禪室必備書目』^⑤を翻刻した^⑥。

さらに、同寺所蔵の岸田吟香書翰^⑦および今回紹介する、「圓山大迂／圓山惇一書翰（北方心泉宛）」^⑧全十二通や、清国で出版された書籍販売目録^⑨を調査し、帰国後に書学の勉強を始めた心泉が、いかに真軒の助言を受けたのか、また上海の樂善堂支店や、当時上海在住の圓山大迂・惇一親子に依頼して小学金石類の書籍を購入した経緯などを明らかにした^⑩。

本資料は、心泉の書籍購入について述べられているだけでなく、心泉の交友関係の一端や、心泉が東京における書道や篆刻あるいは文人の消息をいかに入手していたかを知ることにも出来る。そこで、本資料の重要性に鑑み翻刻することとした。

解題

明治初期の上海には多くの日本文人が滞在していた。上海別院が設置される明治九年（一八七六）前には、岸田吟香、安田老山、岡田篁所⁽¹⁾、佐瀬得所、庄田胆齋⁽¹²⁾などが滞在しており、心泉滞在時には、大倉雨村⁽¹³⁾、内海吉堂⁽¹⁴⁾、吉嗣拜山⁽¹⁵⁾、諫山麗吉⁽¹⁶⁾、鳩居堂の職工⁽¹⁷⁾、巨勢小石⁽¹⁸⁾、塩川一堂⁽¹⁹⁾、長阪雲在⁽²⁰⁾、長尾無墨⁽²¹⁾などがおり、圓山大迂もその一人であった⁽²²⁾。

圓山大迂は、天保九年（一八三八）に名古屋に生まれた。名は真逸、大迂と号し、書齋名は学歩齋、尋常百姓家主人。貫名菘翁に書を学び、一般には篆刻家として知られており、明治二十三年（一八九〇）には心泉とともに、第三回内国勸業博覧会に入賞している。

彼は三度に互って渡清しており、初回は、明治十一年（一八七八）もしくは明治十二年（一八七九）に上海へ渡り⁽²⁴⁾、徐三庚⁽²⁵⁾・楊見山⁽²⁶⁾に師事して篆刻を学び、両刃刀法を日本に伝えたと思われる。心泉もこの時期上海別院に勤務しており、両者が面識を得たのはこの時期であったと思われる。常福寺には心泉と大迂の交流を示すものが所蔵されている。常福寺所蔵の心泉の墨蹟には、明治十三年（一八八〇）七月に大迂が所蔵する画幅を譲ってもらったことが記されており、明治十四年（一八八一）五

月には心泉と大迂と共に杭州を旅した記録として『江浙游草』や『西湖兩游草』⁽²⁸⁾が残っている。その他、明治十五年（一八八二）の上海滞在中に大迂は心泉の印を刻している⁽²⁹⁾。また、心泉の手帖には、明治二十六年（一八九三）に心泉が大迂に対して書翰を送ったことなどが記録されており、本書翰との関聯がうかがえる。

二度目は、明治二十四年（一八九一）もしくは明治二十五年（一八九二）春から明治二十七年（一八九五）頃まで滞在中⁽³⁰⁾、本資料の大部分はこの時に心泉に宛てた書翰である。三度目は日清戦争後に渡航し、帰国後は京都に居を構えている。大正五年（一九一六）歿。編著に『漢話問答篇』⁽³¹⁾、『篆刻思源』⁽³²⁾などがある。

歿後、子の惇一によって出版された『学歩齋三集』⁽³³⁾は、内藤湖南⁽³⁴⁾・長尾雨山・富岡鉄齋・呉昌碩らの序跋や、大迂が篆刻した、三條実美・郷純造・呉大澂・大谷光瑞・巖谷一六・黎庶昌・山岡鉄舟・内藤湖南・磯野秋渚・日下部鳴鶴らの印を収録しており、彼の交流関係を伺うことが出来る。

子供の惇一については、本資料から号を凌秋といい、父の大迂について渡清したということが分かるが、詳細は不明である⁽³⁵⁾。

本資料は『金沢・常福寺歴史資料目録』⁽³⁶⁾に収録されている「書簡 圓山大迂から心泉宛」合計十二通を翻刻したものである。

り、以下各書翰について概説する。

この「圓山大迂／圓山惇一書翰（北方心泉宛）」の書かれた時期はおよそ二期に分けられる。

書翰その一からその四までは、明治二十年（一八八七）から二十五年（一八九二）にかけて、東京在住時に大迂によって書かれたもので、書翰その四のみ惇一の筆による。

書翰その一は、明治二十年（一八八七）九月に大迂が東京から金沢の心泉宛に投函したものである。上海から帰国後、九州を漫遊して愛知に帰郷し、明治十九年（一八八六）五月からは東京に在住したことが述べられている。東京での情報として、三條実美³⁸などの要人と面識を持つようになったことや、東京の多くの篆刻家は相変わらず旧習家が主流であることが述べられている。また、心泉や大迂と同時期に上海領事館に勤務していた大倉雨村³⁹が帰国して本省勤務になったこと、同じく上海に滞在していた長阪雲在⁴⁰が伊勢に帰郷したが、文人社会の衰頹をなげいていること、塩川一堂⁴¹は上海から帰国したものの、再び上海に渡航しようとしたが諦め、現在は京都にいたといった消息や、心泉と同じ金沢出身の山田新川⁴²ら書画家との交流について述べられている。さらに、最近では自分の篆刻の腕前が上達したこと、自分は徐三庚について本場中国での篆刻を身につけて帰国した最初の人物であることを自慢しているほか、金沢では心泉の書は山田新川や心泉を知っている人はみな感服し、評価

を得ていることを大迂も承知していることなどが述べられている。これは心泉が第三回内国博覧会（明治二十三・一八九〇年七月）に入賞する前に、すでに一定の評価を得ていたことを示す重要な記述である。

書翰その二は、心泉と大迂が第三回内国博覧会に入賞した直後に送られたもので、東京では最近、巖谷一六・日下部鳴鶴・中林梧竹らが出て、世間の書風が一変して六朝風となったことが述べられており、書翰その一と同様、心泉は大迂の書翰を通じて東京の書道界の情報を入手していたことが分かる⁴³。自身の篆刻についても、以前は嘲笑の対象であったが、最近では旧守派の大家であり、第三回内国勸業博覧会の審査員（篆刻）でもあった中井敬所なども摸倣しだったが、単なる形だけの摸倣に過ぎないと述べており、博覧会で旧習派が自分の篆刻を認めたという大迂の自信の程が窺える。

書翰その五からその十二までは、上海滞在中の圓山惇一によって書かれたもので、主に心泉が注文した書籍の有無、発送状況あるいは上海の街の様子などについて述べられている。

岸田吟香・楽善堂から心泉宛の書翰と比べると、文章や内容も率直かつ豊富であり、心泉との親しさ分かる。これは、二人が同時期に上海に滞在し、ともに海上派文人たちと交流する中で、心泉は日本人として初めて北派書風を、大迂は両刃刀法を日本に持ち帰ったことが大きく影響していると思われる。ま

た、惇一は熱心に上海の書肆を廻って心泉が所望する書籍を捜しており、書籍の刷りの具合、木版・石版などの区別、書籍の大きさ、著録する内容、帙の表装、郵便料金、支払い方法、さらに心泉が示した値段と大きな隔たりがある書籍については、書名の間違いではないかとして心泉に再確認を求めるなど、非常に詳細に書き記している。

書翰その九によると、心泉は惇一に楊守敬の著作を注文していたが、上海でもなかなか購入できなかった。しかし、書翰その十二では、惇一は偶然新聞広告で楊守敬著書販売を見るや、気を利かせて早々と購入し、心泉にその本を購入するように勧めている。

心泉の注文に対する返事からは、心泉が書籍以外に、石印や拓本の北碑・法帖のほか、字形を載せた書籍を集中的に購入していたことがわかる。おそらく心泉はこれらを書の手本として用いるためだったと思われる。

上海の様子で興味深い記述として、書翰その五には、心泉が以前書籍を注文していた楽善堂が火災にあい閉店したが、番頭であった中国人が近隣に書店を開店したことや、当時上海に設立された日清貿易研究所の名が見える。また、上海開港五十年記念祭の様子や、最近では心泉がいた時代と違って上海に文人がいなくなってしまうこと、上海在留の日本人同士で花見に行ったことなどが書かれている。

この他に、父・大迂が蘇州へ行って兪樾や、師匠である楊見山らと交流していること、現地の文人から大迂に篆刻や書の依頼が沢山あったことなどが述べられているが、惇一の書翰その九・十一や、岸田吟香⁽⁴⁵⁾・内海吉堂⁽⁴⁶⁾の記述と同様、大迂もまた海上派のレベルに満足せず、蘇州・杭州の文人達と交流していたことを示している。

最後のその書翰十二は、日清戦争開戦直前の明治二十七年（一八九四）七月七日（七月二十五日開戦）に投函されたものであるが、惇一は租界内に居住していたためであろうか、開戦前にもかかわらず緊張した様子は感じられない。

本資料は、同じく常福寺に所蔵される岸田吟香書翰とならんで、明治前期（日清戦争以前）の日本国内における書籍に流通状況の一例を示す貴重なものであり、明治二十三年（一八九〇）に心泉が第三回内国勸業博覧会に入賞した後も、引続き「文字禅室必備書目」にもとづいて小学金石類書籍を上海から購入していたことを示している。その他に、東京における書道界や篆刻の動向、上海において交流のあった日本人書画家たちの帰国後の消息や、当時の上海の様子や大迂の消息なども述べられており、心泉が在住した明治十年代前半との違いをうかがうことができる。

翻刻

〔凡例〕このたびの翻刻にあたっては、漢字表記については、原則として現在通行の印刷字体を用いた。また、仮名遣いについては原則として本文にしたがった。

なお、本文中の「」は心泉の書込であることを示し、判読不能の箇所は□で表記した。

その一 圓山大迂書翰（明治二十・一八八七年九月二十六日）

〔封筒表〕石川県加賀国金沢区木新保常福寺交／北方心泉大和尚查升／於東京／圓山大迂

〔封筒裏〕九月念七日⁴⁷

〔消印〕①東京・二〇・九・二六・ヲ／神田②二〇・九・二九・ホ／金沢

分袂以来、意外之睽違之多罪。就テハ此頃御投書、昨日岸本店ヨリ相回言即甚貴柄ニも先年御帰之云々。且爾来無異之条書簡拜承雀躍此事甚御座候。随而小生共も大瓦全堂ヤラ講ヤラ消光在罷候間、乍憚御休意有之度候。却説、小老儀も其後長崎ヨリ熊本辺ヲ漫游⁴⁹、九洲ハ大概足跡ヲ相止メ、漸ク一昨年一先帰

愛、同地ニ凡一年間ノ滞在ニ而、昨春五月来漸上京。然ルニ、何分眩々洋々一大都会故東走西致、イヤ早挽車賃ニ大迷惑出納難償。併シ以御蔭三條閣下相始、其他貴紳巨公之掲采ヲ得、交際ハ餘程妙機會ヲ得申候間乍憚御放心有之度候。然ルニ鉄筆之事者本京ニモ御存ノ通随分沢山有之候共、何分不相変飛鴻堂及雪山堂派⁵⁰ニ而実ニ驚ニ足ルモノ一人モ無之、実ニ困夕旧習家已耳抱腹ニ勝ヘ申候。併シコンナ事ハ貴僧ニ已耳申上候也。

○雨邨老モ昨年帰朝、本京ニ而少々ノ月給官ニ從事有之候処、生憎哉、当春ヨリ非印（※員か）右ニ付、同翁モ先々画事ニ而江湖之目途也。是ハ折々ニ過從申候。雲在モ昨冬ヨリ相互ニ所在相分り、文通折々有之候。同人ハ唯今ハ伊勢郷里ニ在罷候。是モ何分御存知之通、文人社会之衰頽ニ殆ト困却候由。是ハ何処モ同シ秋之暮、実ニ小老共モ連年之硯田悪作御憐察有之候。一堂兄者はモ堂モ不十分之由。当春迄本京ニ罷在候処、不凶シタ事ヨリ又々上海航之二ノ舞之模様之由故、小老共モ大井ニ兄之為ニ相喜居候処、豈斗シヤ其事モ大阪迄参候上ニ而瓦解イタシタ様子、只今ニ而者西京ニ有之趣、呼嗟。海雲⁵¹ハ本籍ノ本郷ニ有之、家内共者在京ニ候ヘ共、是モトコカ遠方ヘ昨年ヨリ游歴中之由ニ而帰宅無之趣。五十嵐兄者奉職有之折々被参候。爰ニ御地産ノ山田新川也⁵²。是ハ貴柄ト致而御懇意云々。是ハ一昨年游愛之時ヨリ交際相結、且唯今モ御存之通接近故、時々集会申候。同翁者御存知之通昼夜作詩三昧、併シ詩調ハ少々後居候

共、随分読書有之二付、相談二者奇妙益友也。且少老ヨリ御伺可申候之処、何分前縷之通り旁以大失礼多謝々々。

○小老游北之云々、新文詩上二有之云々、是ハ餘之儀ニハ無之、御地大書記官徳久公者熊本ニ而到而庇蔭蒙リ申候人也。及高山之産ニ而垣内有隣³⁵ト申画師、当今御地在住之仁。是ハ同郷及少々縁故モ有之人故、先達而両先生ヨリ存問モ有之二付、右等ヨリ之事ト奉存候。併シ小生モ一度御地へ者小游仕度候間、何分可然御吹嘘有之度候。時ニ依候者、本年中ニ而モ拜趨申哉モ難斗、御地御模様ハドンナモノテ御坐リマシヨ。兼而承リ居候梅処ト申大先生有之趣、且同人之弟トカ申ス、矢張小池姓ニ而、此頃本京へ骨董店相開一大瀑ニ而ヤラカス積リ之処、ソウハ旨クモ参リ不申也。此頃ニ而者一寸困り候趣也。御一笑有之度候。

○小生モ刻水晶刀之工夫ヲ数年之鍛鍊ニ而、漸昨年ヨリ成就仕、此頃ニ而ハ如意刻シ申候也。右ニ付、印箋少々貴呈覽候請乞正。尤モ篆刻モ追々俗ニ云フ乞食之子モ三年トヤラ、随分此頃ニ而者乍自分上達ト想得申候。併シ大方之諸君ニ誇ル程ノ事モ無之候へ共、併シ支那直伝之真鉄筆ハ先々本朝ニ而者小生ガ鼻祖ト可申候。只是已耳相喜申候。併シ自非謂能手之、呵々。只不審ナルハ小生帰朝以来、到处徐三庚先生之事ヲ吹散カシ及、追々同先生之事ヲ支那人共ガ吹嘘致シ可申候ノデ、満天下同先生之事ハ同好人共ハ耳食罷在候間餘程小老之為二者妙也。

尤 貴納方モ同先生之吹嘘及頂斯ヲ説クノ一部分也。呉々モ御声援願舛。貴納之御宝書ハ新川方及貴僧ヲ存シ居候人者皆々感服致シ申候。如命ニ不及、御地ニ而書家ノ名ヲ得云々、是ハ小老モ承知也。少老者追々雅事モ進歩申候。九州以来追々雅事ニ而一大半ハ潤筆收入申候。

○近来、御高作ハ沢山可有之鳥渡御洩有之度奉懇願候。先者貴答迄、餘ハ萬讓後鴻候、

○楊南湖之書云々、実ニ御手数数恐入候。其内御幸便ノ節、或ハ御郵報ニ而拜呈願上候。萬謝々々。凌秋及愚妻ヨリモ別封同様宜敷、時下御伺呉候様申出候間末筆乍相伺候。

心泉北方大和尚台下

圓山大迂拜具

その二 圓山大迂書翰（明治二十三・一八九〇年八月三十一日）

〔封筒表〕 石川県金沢木新保五番町／北方心泉先生查升／發東京／圓山大迂 撼寄

〔封筒裏〕 八月卅一日

〔消印〕 ①東□／廿三（以下缺） ②加賀／金沢／廿三年（以下判読不能）

掲来 不可謂之睽濶請恕々々御地辺ハ如何。本京ハ殊之外之風

雨聯天困嘆不尠候。儲、先日者白井子⁽⁵⁶⁾依御紹介鳳書携帶過訪之末、鉄筆伝授之請求二任セ、奥蘊無隔意申進候。就何分賜暇之餘日モ無之、匆々動身遺憾為悵々々。御帰營後、何等之御音信モ無之、日夜苦慮在罷候。定而無異帰邸卜相察候へ共、萬一御会晤モ被致之候は、可然御致声所祈候。先生ニモ御無異之条欣賀々々、且迂生ハ昨秋ヨリ目疾非常傍以テ御命刊モ展閣多罪難謝候。併当時餘程快氣相催候間、不遠就刊乞政請恕。儲、近時一六鳴雀及柯竹等之諸家輩出シ天下之書牀一変、世人刮目始テ六朝之妙所ヲ相覺リ申候。併し北部ニ而者尊台之雷名ヲ相轟、今ハ殆滿天下。雷同之頃欣喜難尽候。随而迂生鉄筆其始世人目シテ狂人之様ニ被嗤咲シモ、今日ニ而ハ古書牀ト一般最早本京老生敬所等之旧守等モ、餘程傾隨之容ニ相成候共、何分所謂団十郎之由良之助外似テ内非、実ニ可咲事共不尠候。是等ハ尊台之能知賜フ所也。呵々。先ハ疎音ヲ謝シ、併時下御消光如何ヲ伺ヒ切望候。

遠安

北方心泉先生 台照

圓山逸真

その三 圓山大迂書翰（明治二十三・一八九〇年十月十九日）

〔葉書表〕 石川県金沢／木新保町第五番地／北方心泉和尚啓／

東京神田市南甲賀町／圓山大迂拜

〔消印〕 ①武蔵／東京神田／廿三年十月十九日／口便②加賀／金沢／二十三年十月二十二日／口便

竭来慮外之際潤御宥恕有之度候。秋涼之候御多詳拝欣々々。小生モ目疾ハ先々全癒候間、客月来秋刻罷在候。就テハ尊台之御属実ニ長々敷ニ付奏刀仕度、此頃其文字ヲ相探リ申候処紛失候間、今一応御教示有之度再願申上候。儲、白井子ハ每度御会晤有之候哉。別封同様御転声奉祈候。近刻沢山有之候間、何其間印影送進可申候。何卒一増御勉務有之候様奉願上候。近来ハ老迂モ又々一増上手ニ相成申候。是ハ自慢也。呵々。

その四 圓山惇一書翰（明治二十五・一八九二年一月一日）

〔封筒表〕 加賀金沢市／北方心泉様

〔封筒裏〕 一月一日（※後人の手により（明治廿五年）と書込あり）／東京市神田駿河台南甲賀町十八番地／圓山凌秋

新年之慶賀千里同風芽出度申収候。先以 上人愈々御安康ニ御重歳被成候段奉遙祝候。随而野生無恙加馬齒候間、乍憚御安神可被下候。平素ハ方外ニ御疎遠之段、平ニ御容赦被成下度、猶不相変御愛顧之程奉希候。先ハ右御祝詞迄。餘ハ永陽之時を期

候。頓首再拜。

廿又五年一月元旦

弟凌秋

北方心泉上人閣下

その五 圓山惇一書翰（明治二十六・一八九三年十一月十日）

〔封筒・消印〕なし

肅啓 秋冷之候ニ御座候処、益々御佳祥奉賀候。降而野生昨春再航⁽⁵⁹⁾之後、無恙ニ罷在候間、乍慮外御放念可被下候。平素ハ殊ノ御無音ニ打過候得共、平ニ御容捨可被下候。偕、過日ハ弊父へ向ケ御芳墨を賜リ難有奉存候。就而ハ其際御依頼の書籍一件、早速相尋御回答可致之処、其節ハ生憎拙宅引越中ニ而、彼是多忙故ニ大延引仕候。然ルニ頃日、処々の本屋ニ至リ聞合候処、御申越之書籍ハ尽ク有之候。乍併「金石聚」ハ直段之処、御申越トハ大ニ相違ニ付、大書林へハ悉ク参リ価格之処取調候処、何れニ而モ定価ハ凡拾弍元是ヲ八折より引不申。此書の外ハ御申越直段ヨリ幾分カ低廉ニ御座候。則左記之通り御座候。尤楽善堂書坊⁽⁶⁰⁾ハ今春近火之為ニ類焼致、再興之事無之、遂ニ閉店ニ相成候ニ付、楽善堂の本邦人及支那人ニ相尋候モ、独りモ承知致候者無之、乍併該書坊ニ番頭ヲ致居候鍾ト申支那人、近

隣ニ書肆ヲ開居候事故、是ニ至リ先生之御書状ヲ示シ、昨年楽善堂ニ於テ或ル友人聞合候際、如斯直段（則八元八折之処ヲ示シ）ニ而「金石聚」被求候旨、兄より相答候哉ト申候処、左様之事ハ無之、昨年ハ少々安価ニ候モ、八元八折ト云事更ニ無之、是ハ多分「金石索」⁽⁶¹⁾の間違ニ無之哉、ト申居候。兎モ角、当今ハ該本少数ニ相成候ニ付、特別直段決着ニ而、九元より一文モ引不申トの事ニ候モ、餘リ之相違故、鍾より証拠ヲ取り、序ニ貴覽ニ入候。他の書林ニ而ハ十二元八折ヨリ引不申。若シ是ニ而宜敷候ハ、御周旋可仕、乍併昨年御照会之節、全ク「金石聚」ヲ八元八折ニテ買得ル事なれば、研究所⁽⁶²⁾ノ書生其人へ御依頼被下度、若シ帰県等ノ事ニ候ハ、楽善堂之誰ナリトモ昨年御談之際、八元八折ニ致置ト相答候支那人へ、書状ヲ御送り被下度、然ル時ハ一応其書面ヲ以而掛合可申、此の価格相違之為、二日間餘リハ東西ニ奔走聞正シ候モ、一軒モ其直ニ而売ルト申家無之ニ付、今日ニ而ハ多分誰カ参リ候テモ御申越ノ直段ニ而ハ難買事と愚察奉候。先ハ不取敢右要御回答迄。余ハ次報ニ相讓可申候。頓首

「金石聚」ハ書林ノ蔵板ニ非ラズ。素人ノ蔵版故、無茶苦茶ニ摺リ不申候。故ニ当今ハ高価ノ由、多数ノ売却ヲ望マザル由ニ付、困入候。

「二銘草堂金石集」 実価洋九元

「葛氏金石十二種」⁽⁶³⁾ 洋七元

○「京畿金石考」⁶⁴

々洋五角

「曝書亭金石文字」

々洋五角

○「平津読碑記」⁶⁵

々洋九角

「中州金石記」⁶⁶

々洋九角

「兩漢金石記」⁶⁷

々洋貳元二角

「孫谿金聚書」

々洋八元

是ハ碑文其他金石類ノ由来所在等不殘記載シタルモノ故
ニ、「金石聚」ノ如キ文字ヲ見ルモノニ非ラズ。一寸見タ

ル処ニテハ金石歴史トモ云フ可キモノカ。

○印「京畿」「平津」ノ書ハ孫谿「金石聚」ノ内ニ在ル故、
若シ孫谿「金石聚」ヲ御求ノ時ハ不要ノモノ也。

送金手続ハ当今ハ誠ニ便利ニ相成候。日本全国郵便局為替取扱
所ナレバ、何れノ地ニ而モ上海ヘの郵便為替手数致呉候。手数
料等ハ左記の通り御座候。依而御入用の品等被為在候節、其手
続ニ而御送金之上ハ難ナリトモ御遠慮ナク御申越之節ハ御尽力
可仕候。

一 金參拾円ニ付 郵便為替手数料三十錢ナリ。壹円ヨリ拾円
迄十錢。廿円迄二十錢。三十円迄三十錢。為替依頼手続ハ日本
國中ト同様の依頼紙へ金額并ニ所在姓名ヲ記シ紙幣ヲ添テ御依
頼ノ事。然ル時ハ上海郵便局ニテ弗銀ニテ洋三十元ヲ受トル事
ニ相成候。尤モ日本同様三十円以上ハ取扱不申。乍併姓名ヲ変
ジ候節ハ何百円ニテモ出来候。

一 書留料 書留ノ手数ハ壹錢ヲ要ス。依而封書ナレバ、外二
五錢ヲ要ス。依而壹封ノ書留ハ十五錢ナリ。目方三匁八分余
一 開封物郵便 拾三匁三分迄貳錢、貳十六匁六分モ貳錢、以
上十三匁三分ヲ増ス事ニ壹錢増シ。書籍印刷物ハ三百目余取扱
候。書籍等モ時ニヨリ開封郵便ニ差出候方却而便利ニ御座候。
少数ノ書物等ハ開封郵便ニ限り候。此ノ他、見本物ト申ス諸品
ヲ送ル時ハ六十六匁以上の物ハ取扱不申候。

大畧右之通り御座候也。

十一月十日

北方心泉先生 机下

圓山凌秋拜

その六 圓山惇一書翰（明治二十六・一八九三年十一月二十五
日付）

〔封筒・消印〕なし

敬啓 向寒之節ニ候処、愈々御安康奉遙賀候。偕、過ル十一日
発拙書⁶⁸最早御覽之事と奉察候。就而ハ其際榮善堂之番頭鍾子和⁶⁹
より呉候書付封入致候積リ之処、多用ニ取紛れ不図失念致候ニ
付、今般東京へ序有之候間封入致御覽ニ供候。偕、当埠モ別ニ
事変たる義モ無之候モ、去ル七十八両日ハ上海開港五十年祭
を催候処、非常ナル賑ニ御座候。当日ハ江中之軍艦并ニ各火輪

船ハ何れモ滿艦飾を致、且市中へ電信柱之如く、凡二丁二四五本位ノ割ニ柱ヲ立テ連ね柱ヨリ柱へ繩ヲ渡シ、其二各国ノ国旗及支那日本之提燈ヲ鉤シ、処々之橋口等ニハ緑門ヲ築キ、河岸通り之大西洋館ハ何れモ国旗提燈等ニ而館之前面ヲ飾リ、午前ニ義勇兵之操練等アリ。煙火ハ日本人ヨリ工部局へ売込シ為、昼夜トナリ打揚ケタルニ付、支那西洋人等ハ殊の外珍敷喝采致候。夜ニハ広東及寧波之幫会と申物行列致候。是ハ小生モ初メテニ而、大二眼福を得候。此の他、種々ナル催シ有之候モ多要ニ付相畧候。兎モ角、近来稀ナル賑ニ而、随分雑踏を極候。先ハ右御報知迄。余ハ後報ニ相讓候。乱筆御推読被成下度候。草々不宣。

十一月廿五日

圓山凌秋

北方心泉先生

その七 圓山惇一書翰（明治二十七・一八九四年一月六日）

〔封筒・消印〕なし

新年之慶賀萬里同風芽出度申取候。先以 高堂御揃御安康ニ御重歳被游欣喜、不斜奉遙賀候。降而野生方一同無事ニ加年致候間、乍憚御放念被下度候。旧年者御懇交ニ預リ奉拜謝候。猶本年モ不相替御撫愛之程奉希候。先ハ新禧御祝迄如斯ニ御座候。

頓首再拜。

附言

昨臘廿四日發書留封書金三拾円入及葉書着^①。拜誦致候処、曾テ御照会之書籍等御入用ニ付、目錄御添御依頼ニ付、速ニ購求可仕の処、何分歳末及年始ニ懸リ殊の外多忙ニ罷在、漸く一昨日ヨリ処々相尋大抵相求候。今便ニ而ハ別記ノ通り郵便開封ニ而發送致候間、此之書ト同時ニ到着之事ト奉存候。「金石聚」ハ已ニ買求候得共、帙ヲ命シタル故両三日延引、何れ次便ニハ相違なく通送可仕候。「秦漢瓦当文字」⁽⁷⁾ハ元寧波之版之由ニテ、当今ハ絶テ無之旨、何れノ書林ニ而同様申居候。依而此之本ハ急ニハ入手六ヶ敷事と愚察致候。是非御望ニ候へ者心懸居不図売物ニ而モ出候際、不遁相求メ可申候。此之替リニ「金石索」ヲ購買致候方宜敷様愚考致候間右様取斗候。是モ帙出来次第「金石聚」ト同時ニ通送の事ニ可仕候。御尋之件、逐一御回答可致筈ニ候モ、多忙之為充分ニ取調出来申ニ付、何れ次報ニ詳細申上度心算ニ罷在候。先ハ不取敢右要迄。萬次回ニ相讓可申候。匆々頓首。

廿七年一月六日朝

圓山惇一拜

北方心泉先生侍史

(別紙)

一月六日發西京丸便送り

兩漢金石記 八本

悟真篇四註 六本

葛氏金石十二種 廿四本

書目答問 貳本

輜軒語 貳本

呂祖全書 拾貳本

合計五拾四本

右之通り通送仕候也。

一月六日

圓山惇一

北方心泉様

此之書籍ニ張リタル郵便切手御不用ニ御坐候ハ、ハガシ
テ御序之之節賜度如何ニ候哉。

その八 圓山惇一書翰（明治二十七・一八九四年一月二十日
付）

〔封筒・消印〕なし

啓者 益々御清適奉賀候。楮、本月六日發西京丸便ヲ以テ書籍
五十四冊及拙書奉呈。其後、越後丸八日ヲ以出航致候際、「金
石聚」及道書十二種等モ郵便開封ニ而差出置候事故、最早御査

収之事と奉存候。今便神戸丸ヲ以テ「金石索」郵送致候間、着
之上ハ一寸葉書ニ而宜敷候間御一報賜度、就而ハ別記之書籍ハ
則チ本日迄ニ發送致候分ヲ悉皆記載致候間、御査収之書籍數ト
御引合被下度候。「秦漢瓦当文字」ハ其後処々相尋候モ無之、
「広群芳譜」ハ鮮明ノ本有之候モ（大イサハ道書十二種位ノ本
ナリ）、定価ハ洋六元トノ事ニ而、仲々四円八折ニ而ハ逆モ入
手六ヶ敷、若シ書目御覽之際、御見違ニ無之哉。全ク四円ヲ定
価トスル時ハ、或ハ小本之摩滅本等之事カモ不凶。字ノ善ク分
ル本ナレバ処々聞合候ニ、第一安価ナル書肆ニ而実価四元位よ
り安クテハ購求六ヶ敷候。「説文篆韻譜」ハ仰セ直段四角ニ而
ハ入手出来不申、依而見合候。「悟真篇三註」ハ「四註」之中
ニ悉皆合本トナル居り候旨ニ付、餘計之事ト存相見合候。「周
易參同契」モ相求メ候。「悟真篇」カ何カノ中ニ合シアリ候
故、是又止申候。今回御申越之書籍一点ニ無之、且ツ家ニヨリ
八折ニセザル物モ御座候事ニ付諸店へ値段問合、然ル後ニ店ニ
於テ悉皆相求候。依而忝部ツ、分チ候。直段ハ大抵別記之通り
位ト奉存候。直段之義ハ書林ニ而モ大ニ勉強致吳間可ナリト存
候。「金石聚」之帙ハ紺木綿ニ而依頼致置候モ、依頼之際傍ニ
アリシユシチン模様ノ帙ヲ見テ、是ハ奇麗ダ面白シト小生餘計
之口ヲ吐候ヲ早吞込ニ番頭聞違へ、紺木綿ヨリハ此の方宜敷旨
承知致、遂ニ金巾ニ而製シ甚タ申訳無之モ、出来タル後之事ニ
付、了管致置候間何卒不惡御諒察被下生ノ粗忽御容捨被下度。

「金石索」ハ近来追々木版大本稀ニ相成、漸く壹部丈ケ見当候。当時石印之小本出来居候得共、只美ナル而已ニ而雅趣無之候。

○石印北碑原刻北碑等ハ当埠ニ而無之趣ニ御座候。袖珍板書画録者画譜之類ニ非ズ。古人ノ書画ニアリシ斯文等ヲ集タル者ト被察候。「庚子消夏録」是モ袖珍書画録同種ノモノニ候。「随軒金石」ハ「金石聚」ノ如ク、同種ノ碑字ヲ双鉤ニ取りシモノ多シ、版ハ別ニ摩滅ト云程ニ無之候。鄧完白石摺ハ美濃紙位ノ大サモアリ、又横ヘ長キモアリ三四種ニ相成候。帖ニハ不致摺落ロシ儘ナリ。書体モ数種ニ而完白之書ハ悉ク備リ居候。余ハ取調分り次第奉申上候。「申報」ハ元価丈ケ御散在被下候ハ、郵税ハ小生ニ於テ負担致長ク郵送致候テ差支無之候。先ハ右要御報道迄。如斯ニ御座候。草々。頓首。

廿七年一月二十日

圓山惇一拜具

北方心泉先生

〔京都ヨリ問合二月卅一日完白石刻 小蓬萊 随軒 篆韵代価 楊著問合〕

悟真篇四註

〃式拾錢

書目答問⁽⁷⁴⁾

〃卅式錢

輜軒語

〃拾錢

呂書全書

〃壹円廿錢

秘書四十八種

〃壹円五十錢

二名堂金石聚

〃九円

右帙四個代

〃五十錢

道書十二種

〃壹円拾式錢

金石索

〃六円

右帙二個個代

〃三十錢

葛氏金石十二種

〃五円廿錢

小計金廿七円四十四錢

外ニ開封郵税

悉皆ニ而

金三円六十四錢

(※「不足一円十錢分」と加筆)

弟凌秋

北方心泉先生

(別紙)

記

兩漢金石記

金式円

その九 圓山惇一書翰(明治二十七・一八九四年二月二十四日)

〔封筒表〕石川県金沢市木新保五番町／北方心泉先生侍史

〔封筒裏〕護二月廿四日 圓山惇一

〔消印〕加賀／金沢／廿〇年三月九日

拜啓 逐日春暖相催候、益々御清栄奉賀候。陳者一月卅一日御投函之芳墨二月六日着。辱拜読致候間速ニ御回答可致之処、生憎支那正月ニ差懸リ、為ニ御存知之通り商店一般ニ休業。漸ク明十六日ニ至リ、悉ク營業相初候位ニ付取調も不充分、其れか為延引ニ打過候段不悪御諒察被下度。就而ハ過般郵送之書籍ハ最早不殘御査取之事と奉察候。「金石聚」之帙御意ニ適候趣御安堵仕候。楮、御照会之書籍、処々之書林相尋候も、「小蓬菜閣法帖」者当今更ニ無之、突然売物デモ出候節之外ハ入手六ヶ敷由。該板も好者之蔵版之趣き故、沢山ニ摺リ多額売捌クト云主義ニ無之、却而世上多ク相成候方ヲ厭ヒ申候。容子ニ而、近來望人多キモ、其求ニ応不申との事ニ御座候故ニ、直段モ實際之処不分明、先ツ急ニ買入ハ難き事ニ御座候。是非御入用ナレバ、書林ニ依頼致置売物出候際、持參可致様申遣置候テモ、宜敷御都合承度。「随軒金石」モ品ナニ御座候得共、二三之書林ニハ持合居候。是も不遠品切ニ相成候も不斗、此の本ハ白紙摺四冊可ナリ版も宜シ、結着壹円廿錢ヨリ負ラザル旨申居候。何分品稀ナル為、家ニヨリ非常之高価ヲ唱居候。品ノ稀ナル者ハ、書目之価格通り參リ難候。楊守敬著「金石」ハ今アルモノ

〔隸篇⁷⁶〕ト申隸書而已ヲ集メタル本、総数拾卷之物有之候、「金石聚」ヨリ心持チ小形之本也。価ハ洋六ナレバ入手出来候外ニハ守敬之著書只今は無由。

○完白山人石摺ハ先日見受ケ候物、仲々数多ク候。悉皆ニ而八拾位ヨリ負ラヌ旨申居候も、是ハ書籍之如ク、慥ニ価格之定リ居ル物ニ無之、依而實際買氣ニ成リ不申テハ、確實ナル価確答難候。若シ御入用ナレバ、御任セニ相成候ハ、可成丈ケ安ク相求可申候。近隣之法帖店ニ而大形之分、篆隸ニ様總数百六十板位アリ（豎壹尺五寸位横一尺二三寸）。但シ曲尺価ハ極結着三円五十錢ト申居候。是等も家ニヨリテハ仲々高価ヲ相唱居リ、兎モ角試ニ一通リ位御求ニ相成候テハ如何。御地ニ而玉石会之催有之、沢山ニ奇品相集リ候趣き、定而盛会之事と奉羨察候。当埠ハ近年珍品大ニ減少致、偶マニ出候も非常之高価ニ而、只驚人而已ニ御座候。大概前年之二三陪ニ相成候。印材ハ昨今当地モ大ニ流行致、為ニ品ハ仲々沢山ニ見受候。乍併価ハ是又大ニ高価、拙モ手出シ兼候。書画幅等モ絶而珍幅無之、惟藍暎之山水幅ヲ相求候而已。余ニモ少々相需候も、御報道致ス程之者更ニ無之、且ツ偶々相求候も、現在之居留本邦人ニハ真ノ風流人一名も無之、為ニ同好ニ相示シ自慢スル事も出来ズ、依而入手之上ニ而も誠ニ楽ミ薄ク候。閣下之御在上中之頃ハ寔ニ愉快候モ、今洋学家等之俗物而已ニ而雅談等皆無之御座候。⁷⁷先ハ乍延引右御回答迄、余ハ次報ニ相讓候也。艸々頓首。

二月廿四日

圓山惇拜具

北方心泉先生侍史

筆墨ニ而モ御入用之時ハ無御遠慮、御申越アレバ何時ニ而尽力可仕候。

その十 圓山惇一書翰（明治二十七・一八九四年四月二十一日付）

〔封筒表〕 石川県金沢市木新保五番町／北方心泉先生

〔封筒裏〕 四月廿一日西京丸便／護 清国上海天津路封／圓山

惇一

〔消印〕①加賀／金沢／廿七年四月二十七日／ハ便②SHANGHAI（以下缺）

（※朱書にて、「郵便切手取り御惠贈被下度願上候」とあり）

拜啓 三月廿九日發之貴翰、本月十日着辱拜読仕候処、御安康奉賀候。随而野生も無事ニ送光、且愚父ハ蘇州へ客月中旬發船、当今未タ該地ニ漫游中ニ御座候。曲園⁽²⁸⁾及楊硯山⁽²⁹⁾兩先生ニモ謁シ、留園等之名園モ歷游致候旨申來候。杭州へモ再遊之胸算ニ而罷越候も、御存之如ク支那旅行者實に不便ニシテ、且旅店等之不潔、是ニハ支那ニ慥れたる弊父モ大ニ閉口致、或ハ杭州

游ハ見合モ不計ト申來候。清明ニ蘇城ヲ去ル数里外ナル虎邱へ舟游致候由、同日ハ何れも蘇垣より舟ヲ僱テ游ニ參り候趣き、虎邱之下へ数千艘トモ言フ可キ沢山ナル游船相蒐り、其中ニモ花船ト申ハ可ナリ大船ニ而實ニ立派ナル者之由、仲々西子湖上ニアル画舫如キ之比ニ非ラザル由、該地ニハ弊父之友人モ可ナリ多く御座候故、一ヶ月位ハ滞留之積リニ而參り候。偕、当埠ハ御存之通り之俗地、風景を賞する之地更ニ無之、本月一日之日曜日ニハ恰モ桃花満開之期トノ事ニ付、同志七八輩ト共ニ看桃ニ參り候。然ルニ實ニ真盛之候ニ而、上海ヨリ此の地ニ至レバ恰モ桃源ニ入ル心地致候。前年トハ事變リ本邦人實ニ多き為、桃園之下ニハ彼所此所ト諸方へ毛氈ヲ敷キ、花ヨリ食氣之連中、杯ヲ拳ケ殺ヲ喫シ、或ハ歌、或ハ舞、殆ント墨隄辺へ參り候思ヒ御座候。然ルニ早已ニ落花之節ト成り、百余度之暑モ追々近ク迫候事ヲ思ハ忌ニ相成候。就而ハ今般御送金式十五円、正ニ入手書籍買入之義拜承、已ニ数部ハ前便ニ通送候。其ニ付テハ、甚タ不行届御周旋ナルニモ拘ハラズ、御謝義等ニ預り候テハ實ニ恐縮之至リ御懇意之間柄故、決而右様御心配無之、御遠慮なく仰付可下候。折角之御厚意ニ付、此之度限り拜領致候、以後ハ決而御断り申候。書籍購求ハ仰セ之如ク、八折ニ而買ヘバ世話無之モ、其テハ買冠リ等御無座候節申訳無之、故ニ御命書林之他へモ問合、其中之安直ニシテ美本ナルヲ求度。依而処々相尋候後ニ相求候間、随分安価ニ相付候、決而一

定八折ト云訳無御座候。時ニヨリ品切等之事アレバ定価ヨリ高キ事モ有之候。故ニ是非二三軒ハ聞合然ル後ニ非ラサレバ買収不仕。自身之物ハ少々之事我氣ニ入レバ高クトモ不苦モ、御依頼ヲ受ケ候者ハ左様之訳ニモ出来不申、依而存外ニ心配ニ御座候。猶少々之買ソコナイ等有之候モ不斗、御諒察被下度候。残余之分モ買入出来タル丈ケ郵送仕候間、御査収之上ハ御一報賜り度。「秦漢瓦当文字」兼而依頼致置候処入手出来候間、是又郵送致候。是ハ近来稀ナル故、五円ヨリ負カラサル旨申候モ、外之書籍等相求候間、八折ニ致呉候。完白山人之拓本ハ大版之方、幸ニ篆書而已位故求候。精々値切り候モ、三円半ヨリハ負カラザル旨ニ付、最後ニ横物四枚八十錢ト申候者ヲ相加へ、三円半ニ而購求致候。完白山人篆隸真草等相集候者ハ、今度ヨリ紙員小形百廿枚位之者ニ御座候、是ハ三円以下ニ而被求候。仲々楷草書モ立派ナル物ニ御座候。篆書ハ左程面白物ナク、今般送附之上ニ出ズル完白山人篆書ハ先ツ無之様ニ愚考致候。先ハ右要迄、乱筆御推読被可下候。草々不宣

四月廿二日

弟惇拜具

北方心泉先生侍史

記

- 一 硃批古今文致 壹円三十五錢
- 一 章刻国語正義 貳円貳十式錢

- 一 礼記集解 壹円五十錢
- 一 曝書亭跋尾 四十錢
- 一 分隸偶存⁽⁸⁰⁾ 廿五錢
- 一 国朝文才調集 六十錢
- 一 說文新附考 七十錢
- 一 注唐詩別載 八十錢
- 一 秦漢瓦当文字 四円
- 一 飛影閣叢画二部 九十錢
- 一 石印張叔未金石 帙共 壹円四十錢
- 一 随軒金石 帙共 壹円四十錢
- 一 鄧完白篆隸六種^{外横物四枚} 三円五十錢
- 一 京片紙極上百枚 十五錢
- 一 申報 旧去年十一月四日ヨリ本年三月四日追四ヶ月 壹円廿錢
- 一 前回之殘金 一円〇八錢
- 一 曝書亭詞註 五十錢
- 一 今般送付書郵税^ズ 壹円八十九錢
- ズ金貳十三円八十式錢
- 右へ金貳十三円收入
- 差引殘不足 金八十式錢
- 右之通り御座候也

四月廿一日

弟惇一

北方心泉上人坐下

その十一 圓山惇一書翰（明治二十七・一八九四年五月十一日付）

〔封筒表〕石川県金沢市木新保五番町／北方心泉先生／侍史

〔封筒裏〕五月十一日／圓山惇一

〔消印〕加賀／金沢／廿七年五月／十九日／□便

「申報」之事ハ小生広告ニ見候モ、自身余リ書籍類之事不承知ニ付相分リ不申候。依而一忒ケ月の隔テ、ハ一ケ月位送ル事ニ致候。宜敷ト奉存候。

謹啓 四月九日五章本月八日着。忝拝読益々御壮榮奉賀候。降而野生無恙消光罷在候間、乍憚御放念可被下候。弊父モ于今姑蘇ニ滞在中ニ御座候。鉄筆及書画之依頼人可ナリ有之候趣キニ付、已ニ忒ケ月程ニ相成候モ、猶一忒週間ハ滞在之旨申來候。是非杭州ヘモ游歴之積リニ而參リ候モ暑ニ向候故、一応帰滬之筈ニ御座候。不潔及不自由ナル事、筆紙ニ難尽モ、又面白事モ有之由。儲、先般發送之書籍類、悉皆御査収被下候趣キ安堵仕候。甚タ不行届ナル御周旋ナルニモ不拘、却而御礼ヲ受、恐縮ニ奉存候。書籍代金他ニハ定価云々の事承知仕候。就而ハ最早大分御求ニ相成候事故、此上ハ当分厄介ナル事御申越無之カト

存居候処、又候御依頼之趣き、イヤ早大困却。乍併先日モ書籍之為ニ御病氣迄モ全快被游候程之事なれば、御断リ申候事モ申上ガタク、ドウデ厄介序テ無御遠慮下シ々々被仰候モ無致方。呵々。

小生ハ買物之事ハ大抵之人ニ負ケ不申、抛テ餘リ買冠リハ無之ト愚考致候。支那人ニ高ク買空敷大利ヲ貪ホラレテハ、実ニ馬鹿氣候間、精々尽力可致候。甘言ニ乘シ早一寸ト自慢ヲ致候。呵々。郵便切手悉ク御送り被下候、誠ニ御手数之段奉鳴謝候。当埠本年ハ暑氣大二早ク四五日前ニ七十五六度之事、両三日有之候。昨今ハ曇天。依而少シ涼氣アリ。晴上リ候上ハ一増暑氣強ク相成候事と察候。牡丹花先月中旬満開、今ハ芍薬花満開、別ニ珍事モ無之候。

風流人更ニ無之、俗物而已ニ而紳士ト云ハレル人物ハ玉突。或花戦争位ヲ無上之楽ト致居候。書画等之談ヲ共スル人絶而無之、日々俗談而已ニ日ヲ送り居候。先ハ右要如斯ニ御座候。草々。頓首。

五月十一日

弟惇拜具

北方心泉上人坐下

その十二 圓山惇一書翰（明治二十七・一八九四年七月七日付）

〔封筒裏〕 大日本石川県金沢市木新保五番町／北方心泉先生／
玉案下

〔封筒裏〕 七月七日／清国上海天津路第八号／圓山惇一拜
〔消印〕 □□／□□／廿七年七月／十三日／口便

拜啓 時下大暑之候益々御安康奉賀候。野生方モ一同無事ニ送
光御座候間、乍憚御放念可被下候。当埠ハ今年暑氣仲中々酷敷
已ニ樂善堂ノ如キハ九十六七度ニ候。野生方少々風涼ナルモ、
九十二三度此之分ニ而ハ土用二百十度モ相算可申耶ト、今より
閉口罷在候。楮、六月十六及廿三兩度之發送書籍ハ最早御査収
之事ト奉察候。就而ハ昨日「申報」広告欄内ヲ謁見致居候処、
不凶楊守敬著書售売之広白アリ。兼而御依頼之事故、直ニ飛ガ
如クニ長發棧ニ至リ相尋候処、別記之書数部持参到来候。乍併
有限書之事故、長時日ヲ費シ、御照会等致居候テハ売切候哉モ
不斗。依テ兎モ角別記之通り相求メ、幸本日出帆之郵船江差出
候。猶、余の本モ御望ニ候ハ、此書着次第御送金被下候
ハ、多分大丈夫買入出来可申候。該書持参人ハ楊之親戚之人
ニ而汪ト申仁ナリ。上海見物旁楊氏ヨリ依頼ヲ受ケ持参シタル
由、凡一ヶ月ハ滞留ノ筈トノ事ナル如何ナル都合ニ而早メニ出
発候モ不斗。依テ可成急ニ御申越被下度、此ノ度ノ期ヲ失シ候
テハ、先ツ入手六ヶ敷事ト愚考仕候。若シ御友人中等ニモ御望

之人有之候ハ、序ニ御申越被下度可成日本ニモ多ク留メ置度
候。直段之処ハ定価ヨリ負ラザル旨申居候も、種々懇談之上八
折ニ為致候。強テ深山ニ売ル氣モナク、上海見物之旅費丈ケ有
レバ好イト云位ニ而、決而安売ニテ多数ヲ捌クト云訳ニ無之、
故ニ八折ヨリハ少シモ引不申候。汪氏ハ湖北ヨリ頃日来滬之
由、楊守敬モ湖北ニ寓居之由、先年楊守敬日本へ「古銅之印
譜」ヲ持参致シ候事アリシ由、依テ相尋候処、楊守敬之宅ニハ
猶數部アルトノ事。八冊ニ而六元位ト申事ナリ。愚父老部取寄
セテ貰フ事ニ致候。不日着之事ト樂罷在候。該譜餘程古雅ナル
由、若御望ナレバ序ニ取寄セテ呉候様申開候テモ宜敷。

記

一金六円四十錢宛端八兩 「隸篇」老部十冊

一々六円四十錢宛端八兩 「楷法溯源」一部十五冊

一々貳円四十錢三兩 「小蓬萊法帖」五本一部

一々貳円八十錢三兩半 「筠清館金石」五本一部

〆金拾八円也

右之通り御座候也

外ニ「望堂金石」 五本 六元

「集帖」 四本 一元二角

「孟法師碑」 一本 三角

右之三集モ有之。此他ニハ何ニモ無末題シ。

弟惇拜

北方心泉

七月七日癸

先生今回ノ送附書籍ハ棚カラ牡丹餅ヨリ大喜之事ト奉察候。

〔註〕

- (1) 松本白華（一八三八～一九二六）、松任の人、真宗大谷派本誓寺の第二十六代住職。名は厳護、白華・西塘・梅隱・林泉・孤松・仙露閣と号す。幕末、大坂の広瀬旭莊の塾に学ぶ。維新後、富山藩合寺・浦上天主教事件に奔走。明治五年（一八七二）、門主・大谷光瑩や成島柳北らと共に欧洲視察。洋行をはさんだ東京で活動したこの間、長三洲をはじめ明治の高官たちと漢詩による交流を行っている。明治十年（一八七七）から十一年（一八七九）まで東本願寺別院上海輪番を勤めた。明治初期の東本願寺の海外布教を考える上で不可欠の人物であり、当時では西洋と中国を両方体験した唯一の日本人僧侶である。主な著作に、『松本白華航海録』（真宗史料集成第十一巻『維新期の真宗』、同朋社、一九七五年）等がある。
- 白華に関して筆者は以下の研究を行った。
- 〔松本白華と玉川吟社の人々〕（二松学舎大学21世紀COEプログラム『日本漢文学研究』第二号、川邊雄大・町泉寿郎共編、二〇〇七年）。
- (2) 北方心泉（一八五〇～一九〇五）、金沢の人、真宗大谷派常福寺の第十四世住職。名は祐必のち蒙。号は心泉・雲進・小雨・月莊・文字禪室・聴松閣・酒肉和尚など。石川舜台の慎憲塾・松本白華の遙及社・成島柳北の翻訳局等で学ぶ。明治十年（一八七七）から十六年（一八八三）まで清国布教事務掛として上海別院に勤務。この間、俞曲園『東瀛詩選』の編纂に岸田吟香とともに関わり、清国の文人達と交流を深める。明治三十一年（一八九八）から三十三年（一九〇〇）まで南京・金陵東文学堂学長。明治を代表する書家の一人で、北派書風を楊守敬とは別にいち早くわが国に紹介。明治二十三年（一八九〇）、第三回内国勸業博覧会に出品し入賞。
- 主な参考文献として以下のものがある。
- 本岡三郎編『北方心泉（人と芸術）』（二玄社、一九八二年）。
- 金沢市教育委員会文化財課編『金沢・常福寺歴史資料目録』（一九九九年）。
- 金沢市教育委員会文化財課編『金沢・常福寺歴史資料目録』（二〇〇一年）。
- 三田良信監修・山中美智子著『心泉―北方心泉碑文集―北方心泉没後百年記念』（北方心泉顕彰会、二〇〇四年）。
- (3) 川邊雄大「明治初年の東本願寺上海別院における日中文化交流―松本白華・北方心泉を中心に―」（人間文化研究機構・国文学研究資料館『手紙と日記―対話する私／私との対話 第三十一回 国際日本文学研究会会談録』、二〇〇八年）。
- (4) 川邊雄大「金沢時代の三宅真軒と北方心泉」（無窮会『東洋文化』復刊第九十九号（通刊第三百三十三号）、二〇〇七年）。
- (5) 『目録』（註2に掲出）、一一二頁、「十、草稿、46」。
- (6) 川邊雄大「常福寺所蔵・三宅真軒撰『文字禪室必備書目』について」（二松学舎大学21世紀COEプログラム『日本漢文学研究』第三号、二〇〇八年）。

- (7) 『目録』（註2に掲出）、一〇一頁「九、書簡日記類、17 書簡岸田吟香・小野湖山から心泉宛、19岸田吟香か心泉宛」。
- (8) 『目録』（註2に掲出）、一〇五頁「九、書簡日記類、72 書簡圓山大迂から心泉宛」。
- (9) 『目録』（註2に掲出）、一四六頁「十一、書籍、279 増補抱芳閣書目、280 醉六堂発兌書籍目録、281 湖北官書処書目」。
- (10) 川邊雄大「明治期の日本国内における唐本流通について―岸田吟香書翰を中心に―」（二松学舎大学21世紀COEプログラム・浙江工商大学日本文化研究所、書籍之路与文化交流、国際学術研討会予稿集『近現代分科会論文集』、二〇〇六年）。
- 「明治初期における東本願寺布教僧の日中文化交流について―松本白華・北方心泉を例として―」（南京大学文学院・人文社会科学高級研究院・域外漢籍研究所『域外漢籍国際学術研討会論文彙編（上冊）』、町泉寿郎・川邊雄大共編、二〇〇七年）。
- (11) 明治五年に上海に渡航しており、当時の上海滞在記として『滬日日記』（明治二十四年）がある。
- (12) 『東京日日新聞』明治八年十月十二日
会津の庄田胆齋と云ふ人が、先達て支那から色々の書画を持ち帰り、来ル十六日、東両国の中村楼にて右書画を持出し展覽会をすると申しますが、随ぶん面白ひものも御座りませう。
- 『東京曙新聞』明治十一年三月十三日
旧会津藩にて画家を以て世間に名声を轟かせしもの曩に加須屋磐梯山内香雪の両先生あり。又近来庄田胆齋・佐瀬得所の両先生ハ游歴して特り我日本国のみならず海外迄も大家の名声を轟かされしが、惜しいかな両三年以来引続いて没故せられたり。（以下略）
- (13) 大倉謹吾（号雨村）のこと。心泉・大迂が上海滞在中には、日本領事館に勤務していた。

東亜同文会編『对支回顧録』（昭和十一年）二二頁に、「大倉謹吾君 君は元と越後の人。大倉良菴の子、弘化二年四月一日を以て生れ、夙に長崎に出で清語を習ひ、明治八年三月外務八等書記に任じて上海領事館に赴任し、屢々官制改正の結果領事館附一等書記見習となり、三等書記生となり、外務書記生となり、十九年三月領事館書記生に任じて在勤十一年、其の五月外務属となり本省に帰つたが、二十三年六月退官した。」とあり、牧田利平編『越佐人物誌』（野島出版、昭和四十七年）に「大倉雨村 雨村は新潟市東堀町通九番町の医者である良庵の子で、弘化二年（一八四五）二月十五日に生まれた。名は行、字は顧言、通称は謹吾、雨村または鉄農半仙と号した。江戸に出、長崎に行つて僧の鉄翁に南画を学び、明治五年清国に渡つた。清国では胡鉄梅、張子祥等と交つた。また上海領事館に勤めるかたわら画の研究をつゞけ、十五年間清国にいた。帰国後は東京に住み、各地をまわつて画をかいた。明治三十二年、長崎に遊び、帰途、岡山で倒れてなかつた。六月十日のことで五十五才のことであつた。」とある。

著書『兩邨画冊』（楽善堂、明治二十一年）では、封面は徐三庚の手によるもので、奥付には「著作者 長崎県平民 大倉謹吾 東京四谷区南伊賀町十壱番地」とある。

なお、岸田吟香書翰（明治十九年七月七日）には「大倉雨村画伯者帰朝致候。胡公寿・張子祥者死矣。曲園翁者無事也。」とある。

(14) 黒田讓『名家歴訪録上篇』（明治三十二年）一三〇頁に、吉堂の回想が掲載されている。

私が支那漫遊に出かけましたのが、明治十年で、三十五の歳であります（中略）其頃は西郷の戦争の時分で、東本願寺の先門主が九州へ下られて、私も全寺の上海別院に寄宿する許を

得ましたから、先門主の御供をしていった幸野梅嶺と、全船で参りましたが、丁度梅雨の頃で、神戸から船に乗って長崎に寄り、夫から上海に興味をもちました。上海には三年許り居り、それから蘇州杭州の方へ入りましたが（中略）それで杭州にも三年程居りましたが（中略）衣服は上海に居りました初めは、日本服でゐましたが、段々持てゐた衣服は弊くなる、止を得ず向ふの服を着て、便宜の為に辮髪にし、冠婚葬祭の節にも度々よばれる、言葉も自然に覚えて来る、まるで向ふの者全様にして暮らしてゐました。夫で画の師といふものは別に定めず、只多くの画家墨客につきあつて、其画を臨摸したりしましたので（中略）氏曰く、上海は商業上の大市で、俗地でありますから、こゝには売書画家、即ち書画で喰てゆくものが多く集まつて、其画も大抵濃彩の花鳥です。杭州杯では、また学者で、餘事に画を描くといふようなものが多く、随分風致の高尚な山水画も見るがあります。こゝでは仇英、戴文進などといふ所謂ゑかき家の画は擯斥して、胸中に面白き氣象のある唐伯虎、文待詔などの画を尊びます。氏また曰く、私が明治十年に支那へ参りました時分は、まだ日本でなかなか南画が流行つておりましたが、上海へあつて見ると、画ががらりと變つて大に失望しました。なれど見る処で学ばねばならぬからやつておりました

が、明治十五年に帰朝して（以下略）
 (15) 弘化三年（一八四六）太宰府生、幼名は寛一、通称は達太郎、名を達、字を士辞、拜山と号す。佩山・拜山人・蘇道・独臂翁・独掌居士と号す。室名は古香書屋。元治元年（一八六四）咸宜園に入門、慶応三年、上京し中西耕石に入門、翌年倉敷県に附属として奉職、明治二年大蔵省勤務。明治四年、太政官国史編輯局、大雨のため右腕を失う、十一年清国に渡航。大正四年（一九

一五）没。七十歳。

拜山については、長尾直茂「吉岡拜山年譜稿」（『桐朋学園女子部研究紀要』第九号、一九九四年）、同「明治時代の或る文人に就いての中国——明治11年、吉岡拜山の清国渡航をめぐって」（『山形大学紀要 人文科学』第十五卷一、二〇〇七年）などがあ

る。
 なお『拜山奚囊』には、海上派の漢詩文のほか、白華の詩や心泉の序文が掲載されている。

(16) 一八五一—一九〇六。号は扇城、字は堯伯、豊前中津の人。心泉と同じ真宗僧である平野五岳の肖像を描いているほか、上海では心泉や、彼の父母（致風・爾爾）の肖像を描いている（『図録』（註2に掲出）、八九頁・141「諫山麗吉 彩色 致風・爾爾夫妻肖像画」（明治十五年）、九〇頁・142「諫山麗吉 彩色 致風・爾爾夫妻肖像画」（明治十五・十六年）。心泉手帖（明治十四年）には、「六月）十四日、大分県士諫山麗吉来院。」とある。なお、岡鹿門「觀光紀遊」によると明治十七年当時は香港に滞在している。

(17) 『朝野新聞』明治十年十一月二十四日
 有名なる西京の鳩居堂熊谷久兵衛八至て家業を勉強し、昨年来支那の徽州・湖州に人を遣ハシ、筆墨の工事を学ばしめしが、其の秘蘊を伝へて竟に博覧場にて一等賞牌をも賜ハリたるハ実に榮譽と云ふ可シ。其の製なる大小各種の筆を試みしに其の毫ハ頸軟を維へ如何にも精妙にて決して支那製に譲らず。

（以下略）

『朝野新聞』明治十二年二月二十三日

西京の熊谷久兵衛氏（鳩居堂）ハ久しく製墨に意を用ひ、去明治八年に其の業に巧みなる職工二名を支那徽州製墨所へ遣ハシ、同十年卒業帰店せしに付、其の法を以て製したる墨教種を

内国博覧会に出品し、龍紋の賞牌を得たるハ美に同氏が多年の功にて、又此たび宮内省より図形百馬の図其外六種の御用墨製造仰付られしといふが、追々支那製に劣らぬ品が出来れば外品輸入を防ぐの一端なるべし。

(18) 黒田讓『名家歴訪録上篇』（前掲書）二二〇頁に、「明治十一年の一月に、清国に渡航し、上海に逗留して彼地の文人墨客に交はり、尚ほ内地をも遊歴したいと思ひましたが、全国は饑饉歳の後とかで、内地は盜賊が多くて危険だと云ひますから、遂に遊歴を果さず、五月下旬に当地へ帰りました。」とあるが、岳崎正鈍『支那在勤雜志』（真宗史料集成第十一卷『維新期の真宗』、同朋社、一九七五年）によると、明治十年にはすでに上海に在住している。

(19) 塩川文鵬（一堂は別号）のこと。塩川文麟の子。「上海ノ岸田吟香翁ヨリ柳北へ贈リシ書簡（去月三十日発）」（朝野新聞、明治十三年四月十三日）に、「（前略）一月中ヨリ西京ノ塩川文麟ノ子、一堂ト伊勢ノ画人、雲在トガ楊州・常州ヲ遊ヒ廻ハリ、蘇州ヨリ杭州ニ赴キ、西湖ノ孤山寺ニ廿日ノ餘足ヲ止メ、西湖ノ真景ヲ大小数幅写シ取り、四五日前上海ニ帰り候。（以下略）」とある。

(20) 伊勢出身の画家、長阪雲在のこと。浅野松洞「続三重先賢伝」（昭和八年）に、「和歌山藩士ナリ。字ハ士孔、通称三郎、雲在ト号ス。栗山俊平ノ三男ナリ。長シテ松阪殿町同藩士長阪綱矩ノ養嗣トナル。性画ヲ好ミ、中西耕石ノ門ニ入り、其ノ名夙ニ京阪ノ間ニ知ラル。嘗テ清国ニ遊ヒ技大ニ進ミ、関西西南画ノ驍將ヲ以テ目サラル。最モ山水ニ長ス。明治三十九年三月、大阪ニ於テ歿ス。年五十九。松阪養泉寺ニ葬ル。嗣子翠雲衣鉢ヲ襲キ又名ア

リ。」とある。

心泉の詩稿には心泉の詩稿には、「次塩一堂韻三疊」、「到諏訪山自在庵、一堂先寓此」、「題一堂画松 癸未十二月」、「過山下古城城趾」、「癸未九月十六日、同一堂雲在秋園諸子賞月於雪月庵、分韻」などと題した漢詩があり、彼との交流の蹟がうかがえる。

(21) 上海滞在記として『滬遊雜詩』（明治十四年）がある。

(22) 心泉の帰国後には小山松溪、村瀬藍水、前田黙鳳、岡千仞などが渡航している。常福寺には、吟香による心泉に宛てた小山松溪の紹介状が所蔵されているが、これは小山が帰国する際に、吟香が持たせたものであろう。

なお、小山松溪については、牧田利平編『越佐人物誌』（野島出版、昭和四十七年）三七八頁に、「高田榊原藩士、伊藤信成の二男で小山杉溪の養子となった。名は堅、通称は三木造といった。子どもの時から画をこのみ、樋口雲仙、小野湖山、服部波山等に学んだ。また岸田吟香の口ぞいで清国で画技をみがいた。清国には八か月いたが、杭州の載用柏について学んでいる。その後清国にわたり、西湖に住んだこともある。松溪は画家としてすぐれていただけでなく詩文にも長じていた。谷如意、江馬天江、巖谷一六等友好は広がった。明治三十六年十一月一日に四十一でなくなった。」とある。

(23) 『篆刻鍼度』八巻に、「余三タビ筆硯ヲ帯ヒ清国ニ漫遊ス」とある。

(24) 大阪市立美術館・渋谷区立松濤美術館『上海—近代の美術—』図録（平成十九年）の「略年表」によると、大迂の渡清は明治十一年（一八七六）に、近藤高史『明治・大正・昭和 書道史年表』（木耳社、昭和六十年）によると、明治十二年（一八七九）となっている。常福寺所蔵の資料からは、大迂は遅くとも明治十

- 三年（一八八〇）七月には渡清しており、書翰その一によると、明治十八年（一八八五）にはすでに帰国していることは確実である。
- (25) 一八二六〜一八九〇、浙江上虞の人、字は辛穀、号は袖海・襄海・井壘・金豊道人など。日本人では大迂のほか、秋山白巖が師事している『滬游雜記』には、「上虞 徐三庚 字辛穀 隸篆書兼鉄筆」とあり、常福寺には彼の書画や篆刻などが所蔵されている。
- (26) 楊岷（一八一九〜一八九六）のこと。字は見山、号は庸齋・季仇・季述、浙江歸安（湖州）の人。隸書をよくし、弟子に呉昌碩がいる。
- (27) 『図録』（註2に掲出）五〇頁、072「五言古詩調 小雨有画 辟」の末尾に「甲辰七月十八日、賦之代辞、大迂先生晒正。心泉於上海客館南窓下拭汗書之。」とある。
- (28) 『図録』（註2に掲出）二三〇頁、372「心泉 紀行文三点」。
- (29) 『図録』（註2に掲出）二一四頁、329「心泉珍藏金石図書」（壬馬一月念九、作于上洋厲舎之南窗、愛知大迂真）。明治十五年頃に刻されたと思われるものに、330「無所適莫」があり、その他に大迂が心泉のために刻したものには、331「皆大歡喜」・332「月 莊臧書」がある。
- (30) 圓山真逸（大迂）編『漢語問答篇』（明治二十八年）奥付に、「明治廿八年五月廿七日發行 編集権発行者 圓山真逸 熊本市安巳橋通鷺丁七十六番地」とあるので、日清戦争開戦後に熊本に引揚たものと思われる。
- (31) 註(30)に掲出。明治二十八年に刊行された中国語の教本。
- (32) 圓山真逸（大迂）著、明治三十二年。『篆刻鍼度』八卷（仁和理齋葛元煦重刊）を和訳したもので、例言に「葛理齋ハ先師徐三庚ヲ友トシ善シ。余曾テ清国ニ遊ヒ袖海先生ニ親炙數年、時ニ先生該書及ヒ『篆学瑣著』各ノ一部ヲ余ニ授ケ、謂テ曰ク、茲書タルヤ句々言々尽ク金科玉条ト言ヒ難キト雖トモ、然レトモ古來諸家ノ遺勲ヲ蒐集シタル者ニヨリ、自ラ選択シテ以テ其薰ヲ摘ミ、其猶ヲ捨ル時ハ群書ヲ涉獵スルノ勞ヲ省クニ足ルヘシト」とあり、葛元煦（理齋）と大迂の師、徐三庚は友人であったことが分かる。また、心泉の詩稿には、「贈葛理齋藏頭三絶」と題した漢詩があるので、おそらく大迂も葛元煦と交流があったものと思われる。
- (33) 大正十一年刊。
- (34) 湖南は序文で、浙派や徐三庚と大迂との関係を簡潔かつ適確に述べている。
- (35) 東京国立博物館の寄贈者の中にも氏名が見えるほか、京都国立博物館所蔵（森岡峻山寄贈）の徐三庚書「隸書七言聯」には、園田湖城の補記として「円山大迂氏秘愛。嗣子凌秋見贈。平盒補裏鑑蔵」とあり、徐三庚から大迂に贈られたものであることが分かる（『上海—近代の美術—』（前掲書）、一七六頁）。
- (36) 註(2)に掲出。『図録』一〇五頁「九、書簡日記類 72」。
- (37) 心泉は当時、東京銀座の樂善堂本店を介して樂善堂上海支店より書籍を購入している。
- (38) 東本願寺と三條実美との関係は深く、心泉を通じて大迂は三條と面識を得たと思われる。のちに心泉の弟子で、大迂とともに京都で活躍した桑名鉄城は、心泉の印を刻しているほかに、臼井惠州・内海吉堂・木蘇岐山・日下部鳴鶴・近衛篤磨・東本願寺・大洲鉄然・蘇州日文学堂・石川舞台の各印を作成しているが、これも心泉を通じて交流関係を持ったことによるものと思われる。
- (39) 註(13)に掲出。

(40) 註(20)に掲出。

(41) 註(19)に掲出。

(42) 加賀の人で、名は長宣、字は子昭、号を新川・太刀山人。常福寺には明治十八年一月に描かれた山田の七言律詩が所蔵されており、心泉とは面識があったことが分かる(『凶録』(註2)に掲出)七四頁、177「山田長宣 行書七言律詩」。

(43) このほかに、三宅真軒が心泉の小学金石類書籍購入のために作成した書目『文字禪室必備書目』にも、「東京ニテ聞ケリ」などといった真軒の東京における伝聞を示すコメントが附されており、心泉友人たちから東京の情報を入手している。

(44) 心泉は楊守敬は入れ違う形で出国しているので面識はなかったと思われるが、日下部鳴鶴・巖谷一六・中林梧竹ら文人仲間からの情報で、楊守敬のことや彼の著作については知っていたのであろう。

(45) 「岸田吟香翁上海ヨリ甕江先生ニ贈ル書簡ノ抄録」(『朝野新聞』、明治十三年三月九日)に、上海の書画家らについて以下のような記述がある。

(上海について) 類リニ処々ノ書画文人ヲ尋子候処、随分学者先生モ有之候得共、皆経学者ニテ歴史ヲ能ク読ミタル人ハ稀ナリ。其経学ト申スモ修身上ノ志ヨリ出タルニハ無ク皆出身ノ為メニ致候学問ニテ、八股文ノ種ニ誦誦致居候者多シ。詩ハ可ナリニ出来候者モ有之、書ハ下手多シ画モ亦下手多シ。医者ハ誠ニ無学ニテ殊ニ杜撰ナル者計リナリ。僧侶ハ全ク乞食ノ仲間ニ御座候。更ニ文学ヲ解シ候者無之。

「上海ノ岸田吟香翁ヨリ柳北へ贈リシ書簡(去月三十日発)」(同、明治十三年四月十三日)

前略 陳曼寿ト云フ蘇州人、今度日本へ参り候。暫ク京阪遊覽

ノ上、東京ニ赴ク由。同人ハ可ナリノ学者ニテ、詩モ出来候。最モ隸書ト篆刻ガ長技ノ様子。東京ノ諸大家へ添書セヨト小生ニ頼ミ候間、宜ク御評判可被下候。曼寿ノ子ハ善福ト申ス廿四五ノ男ナリ。娘ハ慧娟ト申シ、詩モ画モ出来ル由。容貌モ美ナリトノコトナレド、少子未ダ面セズ。曼寿ノ外、胡鉄梅ト云フ画工モ近々日本へ金儲ケニ出立スルトノ事、支那人ノ文人ハ日本へ往キタイ往キタイト申ス者多シ。何デモ日本へ往ケバ金ガ儲カルト思フハ実ニ可笑シ。鉄梅ハ上海ニテ第三番ノ画人、芋塊山水モ可ナリ出来、花卉モ出来候。当地ニテ山水ヲ全紙ニ書カセ、洋銀二元ノ潤筆ナリ。花卉ハ一元ヨリ一元半位ト云フ。日本ニテ大層ナ法螺ヲ吹クモ知レズ、此段御報知申ス。併シ是迄往キシ画工ヨリ少シク宜シカラシカ。当地第一ハ張子祥、第二ハ胡公寿ナリ。其他、任伯年・楊伯潤・朱夢廬等ハ皆伯仲シタル者ナリ。

「上海岸田吟香翁ヨリ淡々社(即旧一円吟社)諸君ニ寄セシ書牘」(同、明治十三年五月十九日)

(前略) 上海ハ至俗ノ地ニテ文学ノ士ハ一向ニ無御座候。本地人ニテモ毛対山ト申ス七十餘ノ老人ト外ニ王某トカ申ス先生有之候得共、大家ト申程ニモ無之由。蘇州・杭州・南京等ニハ經史百家ニ通ジ、詩文モ能ク出来候者モ少々ハ有之由ニ御座候。然ルニ書画ハ潤筆を貪ルガ為メニ糸茶富商ノ雲集スル上海ニ無之テハ不都合ト相見エ追々各省ヨリ筆硯ヲ携テ吳淞江ニ来集スル景況ニ御座候。張子祥・楊伯潤等ノ書画ハ昼夜筆管ヲ握リ詰ニテ、実ニ流行紺屋ノ形置キヨリモ忙敷様子ニ御座候。日本ニテ評判スル胡公寿ハ支那ニテハ格別ニ誉メ不申、只々一通リノ書家ニ御座候。元来日本人ハ真ニ目ナク耳ヲ以テ目トスル方ニ御座候故、誰カ一、二人公寿ガ画ヲ持帰リ自慢致シ候ヨリ遂ニ

胡ヲ以テ第一等ニ置キ候者ト相見エ申候、実ハ張子祥ヨリ下ル事数等ニ御座候。第二ハ楊伯潤、第三ガ胡公寿、其餘ハ胡鉄梅ヲ以テ頭トシ朱夢廬輩ノ如キ数人ハ皆伯仲ノ間ニテ王治梅ハ下等ニ可有之カト存候。右ハ支那流芋魁山水ノ評ニ御座候。油画等ニ至テハ支那全国一人モ其法ヲ得ル者無御座候。近来広東人中ニ油彩ヲ以テ画ヲ作り候者御座候得共、直法ニハ無御座候。

(以下次号)

〔吟香翁書牘ノ統〕(同、明治十三年五月二十三日)

上海ハ俗地ニテ更ニ風雅ノ遊ビ等ハ無御座、日本ニテ文人ト唱へ候書画家ハ全ク当地ニテハ職人同様ノ者ニテ、書画ヲ頼ミ候へバ、紙或ハ絹ノ幅ヲ争ヒ物尺ヲ持出シ、山水ニテ代洋銀何程、花卉ニテ何程、鳥ヲ一羽ニテ何程、二羽ニテ十錢高ナト申ス事ニ御座候。頼ム人モ先生ヲ以テ遇セズ(但シ先生トハ猶日本ニテ先生ト云フガ如シ)実ニ風韻モ無之事ニ御座候。宜ナル哉、其画ノ俗々トシテ嘔吐ス可キヤ。

(46) 註(14)に掲出。

(47) 消印は二十六日となっている。

(48) 東京銀座にあった岸田吟香の楽善堂本店のことか。

(49) 大迂はのちに、日清戦争のため上海から熊本に引揚げているが、この時期にすでに熊本を訪問していることが分かる。

(50) 王啓淑『飛鴻堂印譜』、張灝『学山堂印譜』のこと。旧守派の篆刻を指す。

(51) 不詳。

(52) 不詳。

(53) 註(42)に掲出。

(54) 石川県書記官、徳久幸次郎のことか。

(55) 飛驒高山出身の画家、垣内雲嶙のこと。名は徴、別号に錦

嶺・右竹斎。父右嶙と塩川文麟に師事し、四条派を学ぶ。大正八年(一九一九)歿、七十三才。心泉の周囲には塩川文麟の子の一堂や、弟子の内海吉堂など、文麟の系統の画家が多い。

(56) 白井惠州(蕙州・秋香、一八五七―一九二六)のこと。金沢の軍人で心泉の友人であり、書画・篆刻をよくした。木蘇岐山『五千卷堂集』(昭和十年)には、「金沢白井蕙洲貽磁印一枚」と題した七律が載せられており、註に「君陸軍少佐、征清征俄両役、皆従軍。君学書於北方心泉。」とある。心泉の手帖には、篆刻の下書として、「石川県金沢市田丸町白井惠州」とある。惠州も心泉の印「心泉」(朱文、『北方心泉 人と芸術』(前掲書)一五一頁)を改刻しているほか、心泉の次子、穆の印「月泉」(朱文、『図録』(註2に掲出)二六六頁)を刻している。

(57) 中井敬所のこと。天保二年(一八三一年)生、明治四十二年(一九〇九年)歿。

(58) 白井惠州のこと。註(56)に掲出。

(59) 謙慎堂書道会『謙慎堂書道会展70回記念―日中書法の伝承』(二玄社、二〇〇八年)一七五頁、徐三庚「如夢驚華過六朝」の側款に、「某孫 弟大迂圓山真志于／上洋客館之燈下／此印係先師襄海徐先生之／作者也明治念四季五月再遊／清国適購得于防閑刀法章／灑整然相備所謂点石成金乎／雖未難可知一見非元凡人之作矣。」とある。これによると、大迂の二度目の渡清は明治二十四年春であったことになる。しかし、書翰は明治二十六年(一八九三)のものと思われる。大迂は惇一よりも一年先に渡清したのであろうか。

(60) 当時、楽善堂上海支店は英租界河南路にあった。

(61) 「文字禪室必備書目」には心泉の筆蹟で「石索 50マ 唐已前ノ

- 石刻拓本及鈎勒本一切」とある。
- (62) 根津一・荒尾精らによって明治二十三年（一八九〇）に上海で創設された日清貿易研究所のこと。
- (63) 「文字禪室必備書目」に、心泉の筆蹟で「葛氏金石十種十元」とある。
- (64) 「文字禪室必備書目」に、「京畿金石考二卷 孫星衍」とある。
- (65) 「文字禪室必備書目」に、「平津読碑記八卷統記一卷再統一卷 三統二卷 洪頤煊」 伝経堂叢書之一」とある。
- (66) 「文字禪室必備書目」に、「中州金石記五卷 畢沅」 経訓堂叢書之一」とある。
- (67) 「文字禪室必備書目」に、「兩漢金石記二十二卷 翁方綱」 蘇齋叢書之一」とある。
- (68) 書翰その五（明治二十六年十一月十日付）のこと。
- (69) 不詳。書翰その五にも見える。
- (70) 心泉が圓山に明治二十六年十二月二十四日付で書翰と現金三十円および葉書を発送したことが分かる。
- (71) 「文字禪室必備書目」に、「秦漢瓦当文字一卷 程敦」 乾隆丁未刻本」とある。
- (72) 「文字禪室必備書目」に、「篆韻譜 五角」とある。
- (73) 「文字禪室必備書目」に、「随軒金石文字八種^マ□^マ卷 徐渭仁自刻本」とある。
- (74) 三宅真軒撰「文字禪室必備書目」は本書をもとに作成された。
- (75) 楊守敬「望堂金石」を指す。なお本書はのちに圓山惇一が上海で入手している（書翰その十二参照）。
- (76) 本書はのちに楊守敬「望堂金石」同様、圓山惇一が上海で入手している（書翰その十二参照）。
- (77) 岸田吟香書翰（明治十九年七月七日）、註（13）に掲出。

- (78) 兪樾（一八二二～一九〇六）のこと。字は蔭甫、号は曲園。中山、堂号は春在堂、浙江德清の人。心泉は兪樾『東瀛詩選』の編纂に関わっている。
- (79) 大迂は彼と徐三庚（註24に掲出）に師事したとされる。
- (80) 「文字禪室必備書目」に、「分隸偶存二卷 萬経」とある。
- (81) 書翰その九にも同様の記述が見える。
- 謝辞 本稿作成にあたり、金沢・常福寺前任職、北方匡氏ならびにご門徒の方々には、資料の閲覧・撮影等にご高配をいただきました。厚く感謝申し上げます。